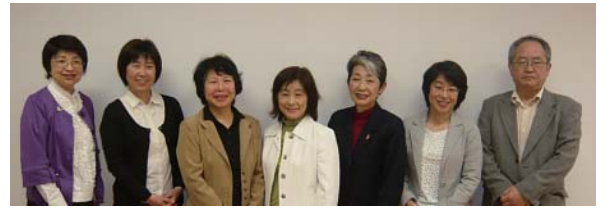


市民ネットワークちば

発行責任者 坪井はるか 湯浅美和子

編集・発行 市民ネットワークちば 〒260-0013 千葉市中央区中央 4-10-11 TEL043-201-2551 FAX043-223-7701



「市民ネットワーク・無所属の会」市議
川本幸立 (緑区・県議)
小西由希子 (中央区)
常賀かつ子 (稲毛区)
湯浅美和子 (美浜区)
長谷川弘美 (花見川区)
福谷章子 (緑区・無所属)
山田京子 (若葉区)
(若葉区)

市民ネットワークちば 20周年

2011年 統一地方選挙 候補予定者一次発表

New

2期目に挑戦



稲毛区 金田 由希

2003年3月 千葉大学理学部地球学科卒業
2003年4月 アパレル関連会社入社
2009年10月 稲毛区市議補選挑戦
2010年1月 市民ネットワークいなげ代表



若葉区 山田 京子

1978年 千葉大学教育学部看護教員養成課程卒業
1995年～1997年 生活クラブ生協 若葉中央支部リーダー
1998年～ 市民ネットワーク活動に参加
2007年4月 千葉市議会議員に初当選

「わたしたちのすすむ道」

市民ネットワークちば 共同代表 湯浅美和子

1990年10月13日の設立総会から20年がたった。活動を始めたころの様子は、10周年記念誌に詳しいが、それを見て「かわったな」と感じたことがある。もちろん「代理人(議員)は原則2期8年で交代。議員報酬はネットへ寄付し市民活動に還元。選挙は力ンパとボランティア」というルールとともに「自治する市民」になろうという思いは全く変わらなずそのままだが、取り巻く環境は激変した。

小さな事務所で肩寄せ合って「ワイワイ、ガヤガヤ、ベチャクチャ、ドタバタ」が活動を生み出す原動力だったような当初の状況から、外見は、立派な事務所を構えたシステムチックな政治団体へ。

「変えよう!」から「どう変える?」と少しばかりグレイドアップしながら、そしてその新たな形をつくり、新しい代理人と進んでいきたい。

しかるに実態は、かわる人はしつかり20年歳をとり、新たな人材の供給も不足、抱える地域課題はウナギ登りで青息吐息。

閉塞感ある地方議会に、「代理人」という新たな視点を送り出し、議会を変え、地方から政治を、社会を変えたいと願ってきたが、千葉市に30代の若者市長が誕生し、国も政権交代が実現した。今の社会の中で私たちの存在意義は何だろうか、と自問する。

熊谷市長挨拶

市長になってみると、市民よりも市議よりも、市政に関して得られる情報量がけた外れに多い。この情報を分かりやすく公開するのが自分の仕事だと思っている。市民の方と話していて驚くことは、自分の払っている税金が、市の行政とつながっていることを感じていない人が多いこと。例えば、家庭ごみを減らすと処理経費も減るので、市民福祉や教育にお金を回すことができる、というような話をすると、なるほどと納得してくれる市民が多い。

市民参加という言葉にはいまだに誤解が付きまとう。市の職員の一部には、市民参加といえば市民の言いたいことを言わせてやって、それをハイハイと聞き流し、最終的には決定権は自分たちが握っていると思っている者もいる。市民のほうも、言いたいときだけ自分の要望を言って、行動しなげれば、何かしてもらおう順番を争っているだけの存在になってしまう。参加に傾きがちな「市民参加」ではなく、私は今、「市民自治」ということを言っている。

その「自治」を根付かせるために、私は今、学校の生徒会役員の選挙に出かけて行って「自治というのは…」と一生懸命話している。



熊谷市長



「私の考える弁護士という仕事、そして政治という仕事」
道 あゆみ(弁護士)

弁護士の仕事は、個々の案件に即して特定の依頼者のために働くことであり、法律を「つくる」のではなく、「使う」ことである。これと比べると議員は法律をつくり、広く不特定多数の人々のために仕事をする。しかし、立法に必要なノウハウを蓄積する時間もとれないまま、選挙に多くの時間とエネルギーをとられていく。また、選挙に当選するためには、多数の人に受け入れられる話をしなければならぬため、どうしてもマジョリティのほうを向かざるを得ない。

こうした中で、どうしたら真の民主主義が実現できるのだろうか。まずは情報公開、市民参加の重要性についての教育、そして選挙制度の見直しが必要である。これまでもこれらの重要性を訴えてきた市民ネットワークが、今後は一般市民との間にある垣根をもっと低くすることでその力をもっと強いものにしていく。それが何より、この千葉の政治を変える一番の原動力になるのではないかと思う。

現在、「NPO法人ひと・まち社」は、行政から受託をし、利用者の目線から福祉事業者の第三者評価を行っている。市民に近いところにいるため市民のニーズもよく分かる。しかし、様々な問題を解決していくには、自分たちの努力だけでは限界がある。よりよい福祉を実現していくためには、市民から、行政へ積極的に提案していくことが必要だと思ふ。

東京・生活者ネット代理人の都議の経験を生かして、多くの市民に政治参加を訴えている。「市民参加は民主主義の心臓である」という言葉を大切にしている。

24年前代理人になった頃は、政策について議会でも質問しても、情報の公開を拒否されて質問することすら拒否されていた。長い時間をかけて、代理人があきらめずに質問し続けることで徐々に情報公開が進んできた。

その後、介護保険に関する調査に携わり、各市で不足している福祉施策が分かっていたことをきっかけに、町の中に相談の仕組みをつくる必要があると考え、福祉施策のシンクタンクを設立した。また、この中で見えてきたのは、市民が「自分たちができることをやっているボランティア」を社会の仕組みの中で「仕事」として成り立たせる必要があるということ。

(NPO法人市民シンクタンクひと・まち社 理事) 池田 敦子

市民ネットワークちば 20周年

第1部 記念講演会

「市民が起こす地域の仕事」